
異世界性転換転生inクレイジー傭兵

DEAD POOL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界性転換転生inkレイジー傭兵

【Nコード】

N4179U

【作者名】

DEAD POOL

【あらすじ】

Ah - Ah -

HelloHello?聞こえてる?つつーが見えてる?読めてる?

Good!

コンニチワイエローモンキーズ!

俺っちはマックイーン・ウィルソン！フリーの傭兵やってるから、戦争したい時や殺したいヤツがいる時はどうぞ……っと言いたい所なんだが、生憎死んじゃったんだよね！

おっと！そんなにガツカリすんなって画面の前のビッグフェイス！余計見れねエ顔になってるぜ！

どうもアレだ、リインカネーションってヤツ？転生っていうの？しちまったんだよ！

しかも女に！これじゃビッチのアナルも掘れやしねエ！まあいいや！たまにや掘られるのも悪くねえな！

それじゃ、中身で会おうぜ！

L e d y s a n d G e n t l e m e n a n d B i g f a c e !

L o o k a t m e ! !

I t ' s a S h o o o o o o o o w t i m e ! !

小説を見る時は部屋を暗くして字を小さくしてそのデカッ鼻を画面に押し付けて

リッチー・ウィルソン

性別：男

年齢：34歳

職業：傭兵

種族：ミュータント人間

能力：超自己再生、身体時間加速、瞬間記憶能力（訓練により完璧な技術のラーニングが可能）、第四の壁の破壊（読者を認識する事が出来る）、狂気

補足：偶に自分をウエイド・ウィルソンと名乗るが意図は不明。

小説を見る時は部屋を暗くして字を小さくしてそのデカッ鼻を画面に押し付けて

HI! Every Body!!

どうもコンニチワ俺様俺さん俺くん俺っち俺自分僕私某我オイラわ
いウチ小生ミー我輩麻呂朕拙者みどもヤツガレ手前こちとらの名前、
リッチー・ウィルソン!

おっと、ちゃんと読めたかな? もう一回言っぜ、リッチー・ウィル
ソン。それが俺の名前だ。

SLAUGHTER (殺戮者) なんて物騒な呼び方されてる。まっ
たく失礼な話だぜ、なあ?

で、今俺がどういう状況か説明するとだな。

「ここまでだな、スロウター……いや、リッチー・ウィルソン。」

銃を持った男達に囲まれてるわけさ。ショッキングだろ? だろ?

流石に俺のミュータント能力の自己再生でもキツそうだ。

But, No Problem!!

俺には奥の手が……

「ひぐつ……ぐすつ……うええ……」

「……A h a n ?」

……勘違いしないでくれ、俺の奥の手が泣き真似なんてベタな展開
じゃあない。

ガチでガキが泣いてるんだ。

まったく、なんでこんなところにガキがいるんだ？

……まあいいさ、勝手にミンチになって死ねばいいのさ。

それじゃあ俺はスタコラサッサだぜ！

「Fire」

……なんで庇ったかな、俺。

うーむ、自分で言うのもなんだが、俺はそこまで善人じゃない。
多分裁判にかけられたら開始直後に裁判長が死刑判決出すくらいの
悪さはしてきた。

キリストが助走つけてロンギヌスの槍をぶっ刺してくるレベル。

あ、そうか。

このガキは昔の俺に良く似てる。

俺が俺を助けない道理はないもんな、納得。

じゃ、死ぬか。

それじゃあな！画面の前のビッグフェイス！！

目がぼんやりしてきた。

……ん？

明るいな。

うすぼんやりとした視界の中ハッキリ分かるのは、こっちを覗くア
ンタら以外のビッグフェイス。

……え？え？

俺っち転生！

HiEve ryBo dy！！リッチー・ウィルソンだ！！

I・m Reincarnation（俺は生まれ変わった）！
！！

意味がわかんねーって？俺もわからん。
死んだと思ったら生まれ変わってた……な、なにを言ってるのかわかんねーと思うg以下略ウー！

hmm・・・これは言い直したほうがいいかな？

HiEve ryBo dy！！リッチー・ウィルソンもといタスコロ
リッテ・ルボミルス力だ！

うん、SEX：Femaleなんだ。
どうしてこうなった。

「*、+QKN>……」

……何言ってるのかわかんねえ。英語じゃないようだが。

どうやらコイツは俺の母親のようだ。

母親、母親ねえ……やれやれ、どうせならもっと早くに死ねばよかったぜ。

なあ、あんたもそう思うだろ？ 思わない？ 死のうぜ？ 死なない？ OK OK そんな恐い顔スナよ。見れたもんじゃねエやな。

まあ美人の胸吸うつても悪くねエな。シツポリいきたい所だが……肝心のナニがついてねえんじゃないア……あーあ、お先マツクラってヤツだぜ、オイ。

「Σ山e……」

……だからナニってんのかわかんねエッて……ああ、だめだ、眠い……

一年ぐらい経ったかな、なにせ赤ん坊なもんでね、時間の経過がわからん。

んで、赤ん坊が産まれた。まだ毛も生え揃ってない……当然か、当然だな。

まあ俺に妹が出来た。それだけ覚えてくれりゃあ結構さ。

驚いた。ここに産まれて4年になるが、まさかこんなもん見るとはな。

母親が、なんつーの？サイキック……いや、ちがうな、ミュータント能力でもない……魔法か？

魔法だな、うん、魔法。魔法を使ってた。

な、何を言ってるのか……え？なにそのワケ知り顔。え？何？まさかこっつて……

異世界？

マジかよー！超クールじゃん！いいねえ！俺はジャパニーズコミックが大好きでね、まるで主人公になった気分だぜ！
なあ、そうだろ……え？何そのワケ知り顔。

さて、トントン飛ばして6年後と行こうか。いや、便利でいいねえ、これ。

説明がラクだ。だろ？

妹……ロザリア・ルボミルスカ、めんどくせえな。ロザリーでいい

や。

ロザリーとちょっと遠出して、近くの山に行つた時のことだ。

久々に抜け出せたこともあつてロザリーはご機嫌だ。

ううむ、どうも俺っちの家は公爵家らしい。ほんとジャパニーズコミックの典型的なファンタジー世界だな。

そんなワケで簡単に家を出ることはできないのさ。

まあ俺がロザリーつれて抜けだすんだがな！

「タスコロリツテお姉様！」

「だから俺の事はタスキーで良いって言ってるだろ？」

「そんな、お父様が怒るわ。」

「いいじゃないか、お前は立派な勇者になるんだろ？親父ぐらい乗り越えなくちゃな。」

「そつか……そうよね！わかつたわ、タスキーお姉ちゃん！」

この世界にはどうも何度か世界の危機が来てるらしく、その都度勇者が現れ世界を救つた……と絵本で習つた。

フェアリーテイルの一種かと思つていたが、どうやらその何代目かの勇者が存命しているらしく、それで俺はようやくフェアリーテイルの世界に来ていることを思い知つた。

「良いコだ、ロザリー。」

そう言つてその銀髪を頭を撫でてやると、嬉しそうに微笑むロザリー。

チンコついてなくてよかった。俺にもロザリーにも。

多分俺にチンコついてたら今頃ロザリーのバージンは……おっと、下品だったかな？そんな顔すんなよ、ビッグフェイス。謝るからさ。

「どうしてわたしの髪は銀色なのかな？タスキーお姉ちゃんみたいにマツクロが良かったな。そしたらお揃いなのに。」

「A H A！そいつア残念だったな！まあいいじゃねえか、親父やお袋とはお揃いだ。」

「わたしはお姉ちゃんがいいの！」

そう、俺はあんたらジャパニーズみたいに真つ黒な髪と目をしてる。親父やお袋を含む親戚筋全員が銀髪なのにも関わらず、だ。

どうもお袋の浮気を疑われたようだが、銀髪と黒髪の場合、常に銀髪が優先されるらしく、「有り得ない」という結果がでた。

そもそも銀髪は他の髪色といくら掛け合わせても子供は銀髪になるらしい。

随分と髪色にこだわるな、って？おいおい、もうとつくに察しはついてるんだろ？ファンタジーの定番、髪色イコール属性ってヤツさ。銀髪は光属性らしく、公爵家以外には発現しないようだ。

黒髪は……闇属性？じゃねえかな、多分。

あ。俺捨てられそう。

まあそんなことをロザリーと遊びながら頭のデッドスペースを使ってホンノリ考えてたら、前方の木から気配を感じた。
わざと気づかない振りをして近づき、捕まえようとした腕をスルリと避ける。

舌打ちが聞こえる。

……ああ、これ、山賊だわ。

頭にバンダナ、無精髭を蓄え、上半身裸の巨漢。な、山賊だろ？

「なかなか勘がいいじゃねえか、お嬢ちゃん。」

こっちをガキだと思って舐めてやがるな。まあいいトコのお嬢様二人が森の中連れ立って遊んでりゃそりゃ力モだわな。
だれだって襲う、俺だって襲う。

まあいいや、死んでもらおう。

スカートに隠していたナイフを抜き出し、能力を発動する。

「C r o c k U p .」

時間がゆっくりと流れる。山賊のマヌケ面がよく見える。唇がゆっくりゆっくり動く。まだ喋る気だったのかよ。
んで、山賊の両足の腱を余裕を持ってスパッと。

……チッ、時間切れか、この体だとあんまり持たねえな。

「大人しくし……ガアアアッ!？」

まだ喋ろうとしている馬鹿を無視して、もう一回発動。
今度はお手手と手首が泣き別れ。モチ両手な
と、なった所で時間切れ。

「お、俺の手が!？手がアアアアーッ!？」

そう叫んで目の前にいる俺に一步前に足を出す……モチロン両足の

腱が切れてるからそのままブツ倒れる。
ひょいと避けてー

「テメエエエエえあああガフウッ！」

ある程度叫ばせてから頭を踏みつける。地面と接吻なさいってな。

呆気にとられるロザリーを呼び寄せる。

「……すごい、すごいよお姉ちゃん……」

「ロザリー。」

「なに？」

ロザリーの手にナイフを握らせる。

「殺せ。」

ロザリーの白い頬から血の気が退いていく。

「…………え？」

「殺せ。」

「な、なんで!？」

「お前は、勇者になるんだろう?弱い人を護るんだろう?こいつは弱い人を傷つける。時には殺す事もあるだろう。お前は、勇者になるんだろロザリア!」

「…………できないよ。」

「…………ロザリア。」

「殺すなんて…………殺しちゃったら…………」

「ロザリア、私の手を握って。」

そう言ってロザリーに手を差し出す。
その手のとったロザリーはすぐに気づくだろう。

「……お姉ちゃん、震えてる……。」

「……私も、こわいの。きっとこの人はトドメを刺さなくてもいつか死ぬ……。」

「……」

「自分自身を……なによりも、あなたを……護りたかったから……」

「お姉ちゃん……」

「おねがい、ロザリー……私を護って……私だけじゃ……重すぎる

……」

「……」

「お姉ちゃんは、わたしが、まもるの。」

ズグニユッ

ブシヤッ

俺の演技力パネエ！

これでロザリーも立派な勇者になってくれるだろう。
ウンウン！我ながらいい仕事したぜ！！

潮時の意味は丁度良い時期って意味だぜ！引き上げ時とかそういう意味じゃない

「はッ！やあ！とお！」

「ほい、ほい、足元がお留守ですよっと。」

「あいたっ」

あの山賊の一件から、俺はロザリーに戦闘技術を教える事になった。なに、ロザリーがどうしても教えてくれて言うもんでね。

いやー、良い目をしてたなあ。昏い火の灯った濁った目だった。

ありゃあ人殺しの目だね、うん。素質あるよロザリー。俺が言うんだから間違いないね！

んで、ロザリーにとってはラッキーなことに、俺の特技として瞬間記憶能力がある。

今まで戦ってきたヤツラの技術や戦い方から癖からコツまでバツチリ。

それがどういう事かというと、訓練さえすれば俺っち完璧にラーニングできるのよ。

つ・ま・リッ！

俺っちは剣術杖術弓術槍術銃術柔術モーターコンバツ……あ、最後違っわ。

まあe t c e t cをマスターしているのだよッ！！

っていうかぶっちゃけ格闘だと最強だと思っただけ俺っち！

まさにタスキーの名に恥じない……ああ、いや、こっちの話ね、うん。

でもなあ……向こうの世界じゃ普通に空飛んだり、目からビームだしたり、キレた分無限にパワーが上がったり、神だったり。

その中生き残つてきた俺の最期が銃弾だつてんだから世の中わかんねーな。

さてさて、俺が今教えているのは剣術だが……えらく呑み込みが早い。早すぎる。

え？なに？勇者補正？ああ、なるほど、天才か。流石は我が妹！鼻が高いぜ！

……この調子だと基礎さえ教えればあつという間に……

ん？まさか。

いままで剣代わりに使ってきた棒より、ちよつと長めの棒を持ってきたて枝払いをして、簡単な杖を作る。

ちよつと基礎を教えてみる。

完璧でござる。

ええええええええええ
W W W W W W W W W W

呑み込みのスピード俺より早いwwwwwwwwなんなのこのコ

W
W
W
W
W
W
W
W
W

おっと、失礼。思わず芝生やしてしまった。そんだけショッキングだったのさ。

ううむ、基礎の瞬間学習か。

応用から基礎を覚える俺とは対照的だな。神的な作為を感じる。いや、作者とか読者様とかいう意味じゃなしに。

こいつなら基礎からどんどん応用していくだろう。ちょっと教えてやろう。

「いいか、ロザリー。武器つてのは敵を倒す道具にすぎない。わかるな？」

「うん！」

「つまり、敵さえ倒せれば武器に拘る必要は無いんだ。例えば……ちよつとその棒で打って来い。」

素直に打ってくるロザリーに対して俺は得物をぶん投げる。

「ええええッッはうッ！」

虚を付かれたロザリーは動きが止まり、その隙に俺にデコピンを食らう。

投げた棒避けたのは流石の才能だな。

「と、まあこんな感じだ。男の場合はキンタマ潰せば勝ちだから、

脛当ては丈夫なのにするといいぞ。」

「キ……キンタ……」

ロザリーさん顔真つ赤。初心だねエ。

それをからかって、楽しい修練の時間は過ぎていった。

……そろそろ潮時だろうな。

準備をしておいたほうがいいだろう。

俺の頭の中の戦闘に関するスキルを、全て日記帳に書き写す。これだけで丸二日かかった。

ロザリーに心配されたが、やめるわけにはいかない。如何せん時間が無い。

さて、「アレ」はどうするか……ああ、あそこがいい。あの平原の、ロザリーが始めて人を殺した木の下が。

朝起きて、飯を食っていると親父と目が合った。その目を見て俺はその日が来た事を知った。

「ヘイヘイヘイヘイ！どうしたよ親父、どうしたよブラウン・ルボ
ミルスキ！レディの扱い方すら知らない公爵様ってどうよ？まった
く、レディをこんな夜中に連れ出して腋に抱えるってのはどういつ
た了見だ？レイプでもする気か？馬の上だけに騎乗位ってか？HA
！テメエの粗チンじゃ俺のロリマンコでもガバマンだろうよ！HA
HAHAHA！」

「黙れッ……この公爵家の恥がッ……！その粗野な脳みそや軽口だ
けでも我慢がならんというのにッ……拳句の果てに魔盲と来たッ！」

「ハッ！それでどうする？捨てるのか？殺すだけの度胸も無いのか
？タマナシ野郎がッ！殺れよッ！犯れよッ！やれよッ！DOOOO
OOIT!!！」

「……ッッこのッッ……いや……もういい……どうせ死ぬのだ
からな。何故殺さないのかと言ったな？シンプルだ。魔物に食わせ
るのが一番簡単な証拠隠滅になる。」

「アンタにとつちや慣れた事だな？なあ、ブラウン・ルボミルスキ
？」

「……そろそろだな。さあ、餌になってこい。」

「きゃんッ！いったア！骨盤折れたッ！投げるこたあねえだろうよ
！ファック！覚えてろ！テメエのケツの巣フィストファックしてや

るからなッ！！あ、聞いてねえや。遠ッ。」

さてさて、どうしたものかッ……なッッッ！！

「ゲゲアアッ！」

ううむ、魔物が多い。確かにコレは死ねるな。

まあ実験の結果、ある程度の回復能力も受け継いでるのが分かったからそうそう死にはしないだろうが。

しかしなんでまた、人間の突然変異種であるミュータントの能力を受け継いでるんだ？転生の特典ってヤツか？

……考えても仕方ねえな。まずは目の前の魔物をぶち殺さなくちゃあな。

減らねエエッ！！こりゃあ殲滅よりクロックアップしてとっとト
ンズラしたほうがいいな。

その前にちよっとお腹が減ったんで猿っぽいや魔物の腕を斬りおとし
て、モグモグ。マズいが仕方ない。

「Clock……」

「大丈夫かッ！」

「……Ahann?」

誰だアンタ。

数秒の間に二ヶ月立ってる気がする！なにこれ怖い！（前書き）

A H A H A H A ！！作者が大学受かって浮かれてるらしいぜ！死ねばいいのにな！

数秒の間に二ヶ月立ってる気がする！なにこれ怖い！

イキナリ突然表れたおっさん……いや、爺さんって言ったほうがいいのかね？

爺さんだな、爺さん。白髪だし、髭むつちや生えてるし。ほら、G H I B L I の N a u s i c a a の Y u p a みたいな？
言ったる？俺はジャパニメーションが大好きなんだ！

爺さんが現れて、手に持ったグルカナイフみたいな剣を二振り持ってモンスター相手に闘いだした。

バツバツサと猿の首を搔つ切っていくその様はちよつとしたダンスだ。始動が次動に直結した動き。例えるならショーパブのアンジェリカ！あいつは最高だったぜ！俺に銃口向けてこなけりやな！！
しかしすつげえなあ爺さん。ちよつとラーニングさせてもらうか。

随分と珍しい剣使ってやがんなあ。湾曲した刀の先が太くなった形。グルカナイフを長くした感じ。

ふむふむ……ふむふむ……

数多ッ！！

いや、ホントあの猿は数へらねえな！そろそろ助太刀しようか。
ナイフをくるつと逆手に持ってえ

「Clock Up！」

とりあえず近くにいた猿の首をナイフで搔つ切る。
さてさて、とりあえず爺さんの後ろにいる猿の首もサクツと……い

けない！！WHY！？

あ、刃こぼれしてら！萎える！超萎える！！

SHIT！！しかたねえ。目潰しだけで勘弁してやらあ！
シザーズハンドでもってけアアアイズ！！

よっしゃ次イツ……

！？

イツツてえ！！！！

S・H・I・T！

忘れてた！今俺7歳の幼女だった！反動パネエ！超いてえ！
時間の流れが俺に追いついた！もう時間切れかよ！

驚いた顔した爺さんに叫ぶ。

「おい爺！！キリがねエ、退くぞツ！」

「……いや、大丈夫だ。少し待ってくれ。」

頭イツてんじゃね？この爺。

「魔力は火力ッ！聖なる力よ、我が手に集えッ！魔砲ッ！ホー
リイイレイツッ！！」

あのですね、こう、唱えた……ッつーより叫んだ爺さんの手に光が集まったかと思うと、手からビームが出てですね……目測3キロが灰になったぜ!!! Yeah!!

……なにこのバ火力……

向こうの世界でもあの火力は中々いねえぜ……

まあガチバトルしたせいで月の半面を耕した無限馬鹿力と声帯超音波よりかはマシか。

ッつーかなんなの？馬鹿なの？死ぬの？ッていうか俺ちよつと余波食らってるからね？飛んでるからね？あ、ほら木にたたき付けられ

「たとばッ！」

ほらな。

この体だと受けるダメージもでけエな……ああヤダヤダ。

ぶッつちやけ肩甲骨と背骨にヒビ入ってるしいー。普通だったら重傷だぜ。

ま、すぐ治るからいつか。ホント自己再生様々だぜ。

「……すまん、やりすぎた。大丈夫か？」

「ッッざッッけんじゃねエぞ糞爺ッッ！モノ考えて撃ちやがれアルッハイマーかテメエ！怪我は治ってもイテエもんはイテエんだよッッ！！ナイフ逝ってなきゃあブツ殺してる所だぜッッ！ポ

「コチンぶツた切ツてやるぜメエエーーン!!」

「!?!」

少し間を置いて。

「……すまなかつたな。」

「Shut up! 黙りな! 口でクソ垂れるだけなら浮浪児でも出来るぜ! 誠意ってヤツを見せろよ糞爺!!」

「……しゃらつぶ、とやらが何かは分からないが……この少し先に俺の小屋がある。どうだメシでも食って行かないか。」

「ありがとう素敵なオジ様愛してる! 爺マジ爺!」

「いやーこの体でクロックアップすると体力使っし腹減るんだよねー。マジありがてエ。」

「お礼?言わねーよ?だってあの位ナイフ無くてもラクショーで片付けられたし。嘘じゃねーしレアリーだし。」

「……詳しい話は向こうですとしよう。」

「A H A!! まかせな、お喋りは超得意だぜエ!」

「……それはもう知ってるよ……」

ハアとため息つく爺。
何？ストーリー？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4179u/>

異世界性転換転生inクレイジー傭兵

2011年10月10日02時20分発行